保元物語

新院御経沈メ附崩御ノ事

さる程に新院は、八月十日御下着のよし、国より御請文到来す。此の程は松山に御座ありけるが、国司既に直島といふ処に、御所を造り出されければ、それに遷らせおはします。四方の築垣築き、唯口一つあけて、日に三度の供御進らする外は、事問ひ奉る人もなし。さらでだに習はぬ鄙の御住居は悲しきに、秋も漸う闌け行くまゝに、松を払ふ嵐の音、叢に呼ばる虫の声も心ぼそく、夜の雁の遥に海を過ぐるも、故郷に言伝せまほしく、暁の千鳥の洲崎にさわぐも、御心砕く種となる。我が身の御歎きよりは、僅に附き奉り給へる女房たちの伏し沈み給ふに、愈よ御心苦しかりけり。

朕、遥に神裔を受けて天子の位を践み、太上天皇の尊号

を蒙りて、枌楡の居をしめき。先院御在世の間なりしかば、万機の政を心に任せずといへども、久しく仙洞の楽に誇りき。思出なきにあらず。或は金谷に花を翫び、或は南楼の月に吟じ、既に三十八年を送れり。過ぎにし方を思へば、昨日の夢の如し。如何なる前世の宿業にか、かゝる歎に沈むらん。縦令鳥の頭白くなるとも、帰京の期を知らず。定めて望郷の鬼とぞならんずらん。偏に

後世の御為とて、五部の大乗経を、三年が程に御自筆に遊ばして、貝鐘の音も聞えぬ処に、置き奉らんも不便なり。八幡山か高野山か、若し御免あらば、鳥羽の安楽寿院の御墓に置き奉りたきよし、平治元年春の比、仁和寺の御室へ申させ給ひしかば、五ノ宮よりも、関白殿へ此の由伝へ申させ給ふ。

殿下より、能き様に執り申させ給へども、主上終に御許

されもなくして、彼の御経を即ち返し遣はされ、御室より、「御とがめ重くおはします故、御手跡なりとも、都近く置かれ難き由承り候間、力及ばず」と御返事ありければ、法皇此の由聞こし召して、「口惜しきことかな。我が朝にも限らず、天竺震旦にも、国を論じ位を諍ひて、伯父姪謀反を起し、兄弟合戦を致す事なきにあらず。我れ此の事を悔い思ひ、悪心懺悔のために此の

経を書き奉る所なり。然るに筆跡をだに都に置かざる程の儀に至つては力なし。此の経を魔道に廻向して、魔縁となりて遺恨を散ぜん」と仰せければ、此の由都へ聞えて、御有様見て参れとて、泰頼を御使に下されけるが、参りて見奉れば柿の御衣のすゝけたるに、長頭巾をまきて、大乗経の奥に御誓状を遊ばして、千尋の底に沈め給ふ。其の後は御爪をもはやさず、御髪をも削らせ給

はで、御姿を窶し、悪念に沈み給ひけるこそ恐しけれ。かくて八年おはしまして、長寛二年八月二十六日、御歳四十六にて、志度といふ所にて崩れさせ給ひけるを、白峰といふ所にて煙になし奉る。

此の君怨念に依つて、生ながら天狗の姿にならせ給ひけるが、其の故にや中二年ありて、平治元年十二月日、信頼卿に語らはれて、義朝大内にたて籠り、三条殿を焼

き払ひ、院、内をも押し籠め奉り、信西入道の一類を滅ぼし、掘り埋まれし信西が死骸を掘り起し、首をば大路をわたしけり。絶えて久しき死罪を申し行ひ、左府の死骸を辱しめなど、余りなる事申し行ひしが果す所なり。去んぬる保元三年八月二十三日に、御位春宮に譲り給ふ。二条ノ院是なり。院と申すは、先帝後白河の御事なり。信頼も忽ちに滅びぬ。義朝も平氏に打ち負けて

落ち行きけるが、尾張ノ国にて相伝の家人、長田ノ荘司忠致に討たれて、子共皆死罪流罪に行はる、誠に乙若宣ひけるが如くなり。栴檀は二葉より香しく、迦陵頻は卵の中に妙なる音あるが如く乙若幼けれども、武士の家に生れて、兵の道を知りけることこそあはれなれ。此の乱は讃岐ノ院いまだ御在世の間に、まのあたり御怨念の致す所と人申しけり。

仁安三年冬の頃、西行法師、諸国修行の序に白峯の御墓に参りて、つくづくと見参らせ、昔の御事思ひ出し奉りて、かうぞ詠み侍りける。

よしや君昔の玉の床とても
かゝらむ後は何にかはせむ

治承元年六月二十九日、追号ありて崇徳院とぞ申しける。

〔口訳〕八月十日新院御到着の由、讃岐国からの報が著いた。松山にお出になつたが、国司が直島といふ所に御所を御造営したので、其処へお遷り遊ばした。四方に築垣を築き、門一つ、日に三度の供御を奉る外は、訪ふ人もない淋しい鄙の御住居であつた。（お淋し気な御様子を原文には次の如く述べてゐる。）

さらでだに習はぬ鄙の御住居はかなしきに、秋もやう〳〵更け行くまゝに、松をはらふ嵐の音、草叢によばる虫の声も心細く、夜の雁の遥かに海を過ぐるも故郷に言伝せまほしく、暁の千鳥の洲崎に騒ぐも、御心をくだく種となる。我身の御嘆よりは、僅かに付奉り給へる女房たちの伏し沈み給ふに、弥々御心ぐるしかりけり。

新院は佗しい配所の御住居に、明け暮れ在りし日の夢を追ひ給ひ、「望郷の鬼とならん。」と仰せられたが、御発念あつて五部の大乗経を三年間かゝつて御写経遊ばされ、貝鐘の音も聞えぬ所に置くのを残念に思召して、八幡山か高野山、御許がある

ならば鳥羽の安楽寿院の故鳥羽法皇の御墓所へ奉納し度き旨、仁和寺の五の宮へ申入れさせられた。五の宮から関白忠通へ此由お伝へになり、忠通は色々御取計らひ申上げたが勅許なく、御写経を御戻し遊ばされたので、御室から書を添へて御返しになつた。

「御咎が重くて、御手跡たりとも都近くへは置けません。御気の毒に存じますが、何とも致方が御座いません。」

新院は御返事を御覧遊ばされて御無念に思召された。

「残念な事だ。此度の事に就いては自分も悔ひ、悪心懺悔の為に此写経をしたのだ。それに筆跡さへも都に置かない程の取扱ひを受けては仕方がない。此経を魔道に回向して、魔縁となつて遺恨を晴らさう。」

と御恨み遊ばされた。此由が都へ聞えたので、康頼を御使として讃岐へ検分に差遣はされたが、柿の御衣の煤けたのに、長頭巾を召され、大乗経の奥に御血を以て御誓状を認め、千尋の海底に御沈め遊ばされた。其後は御爪もお切り遊ばさず、御髪もそのまゝに、御姿を変へて悪念に沈ませられた。

斯くして八年の間お暮し遊ばされ、長寛二年八月二十六日、

御齢四十六歳で志戸といふ所で崩御遊ばされ、白峰といふ所で荼毘に附し奉つた。

新院の御怨念によつてか、御配流の後三年目、平治元年十二月九日、信頼に語らはれて義朝が大乱を起し、三条殿を焼き払ひ、院（後白河院）及び主上（二条天皇）を押し込め奉り信西の一類を亡ぼしてその死骸を掘つて首をさらす様な有様となつた。結果は康頼・義朝共に滅んだが、まことに乙若の言つた様になつた。旃檀は二葉より薫しいと言ふ通り、乙若は幼少ではあつたが武門に生まれ兵の道を心得てゐた。

仁安三年の冬、西行法師が諸国修行の途次、白峰の御陵に参拝して往時を思ひ出でて、一首を詠じた。

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ

治承元年六月二十九日崇徳天皇と御追号があつた。

本書は共訳者のうち、能勢朝次が担当しました。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション

『物語日本文学 第二期 第五巻 保元物語・平治物語』藤村作 等 訳